

\*ポレーシェとはチェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



## 第5回スタツア開催!!

6月26日午前11時10分、参加者11名を乗せたフィンエアがセントレア空港を飛び立ち、待ちに待った「2008 菜の花スタディツアー」がスタートしました。今回のスタツア計画時には、現地で「BDF 製造装置の火入れ式」を…と意気込んでいましたが、ウクライナ国内法による申請書類の遅れ等から実現不可能となりました。しかし、確認しておくべき事のたくさんある旅です。



ヘルシンキを經由し、2日目深夜ジトーミルに到着、3日目農大放射能検査室を訪問。リタージェ技師によると「通常は食料品を中心に検査をしている。今回の菜の花PJでバイオマス・土壌の検査もしており、負担がかなり増えたので1名の増員を検討中」と、力強い説明。4日目は、菜の花畑、大きく育った秋撒きといっぱいの花を咲かせている春撒きの菜種が、元気良く私たちを迎えてくれました。5日目は、元凶「チェルノブイリ原発4号炉」と、廃墟「プリピャチ市」の見学です。原発に近づくにつれ、益々大きく鳴り続ける検知器の警告音は、通常の数百倍の数値となり、参加者も緊張気味です。今回は、プリピャチ市の無人集合住宅にも、特別許可で入ることができました。一歩足を踏み入ると、家具・家財は勿論、建具類まで略奪され、荒れ放題の現状に愕然とさせられました。6日目は、「チェルノブイリの消防士たち」をはじめとする、支援3団体との面談。「被害者たちは高齢化し、法的には保護・支援対象になっているが、国家は予算がないと言って、何も対応してくれない」と切実な訴えが続きます。この間に2回、現地サイドと「BDF 設置に関する真剣な話し合い」が行われました。遅れている申請書類の準備もほぼ完了し、BDF 稼働を8月下旬までに行うことで合意、旅の中で一番明るい話題となりました。「スヴェトコール薬局」のコルジュ氏宅・州庁舎食堂・湖畔の招待所・州消防署食堂・原発30<sup>km</sup>圏内レストラン・キエフ市内カフェテリア等でのパーティ・食事会も楽しいひとときとなりました。日程の前後は、ヘルシンキ経由で北欧の雰囲気も少し味わって、全員無事帰国することができました。（\*参加者の感想は、P6～8の特集に掲載しました。）

（神谷 俊尚）

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10  
 チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇  
 郵便振替：00880-7-108610  
 TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00～17:00）  
 ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

## 現地報告 (宮腰 吉郎)

原さんの現地滞在に合わせてウクライナ入りしたのは5月半ばのことですが、それから約2ヶ月の間、原さんの仕事の手伝いをしつつ、その活動の様子を撮影し、また、ドイツへの視察やスタディツアーにも参加してきました。その報告をします。

私がこのプロジェクトに関わるきっかけとなった、前回の「20周年スタディツアー」から早2年が経ち



ますが、その時は、よもやこんなに何度も現地に足を運ぶことになるとは思ってもみませんでした。ただ、何度も足を運び、現地の人々の話に耳を傾けているうちに、現地の感覚を肌で感じることができるようになり、同じ放射能の被害を受けた日本人たちが、自分たちのことを忘れずに支援を続けていることに対して、現地の人々が感謝の念を持っていることもよく分かってきました。

ただ、「日本の支援が有効に生かされていない」と現地で受け取られている面もあるようで、例えば、チェルノブイリ以前水道工事を実施したセレッツ村では、その後、「その水道が機能していない」ということがあり、実際に前回のスタディツアーや2006年代表団訪問時には水が出ていた給水栓からは、もう水が出なくなっていました。一方で、菜の花プロジェクトについていえば、去年の春時点ではまだ関係者以外にはほとんど知られていない状態でしたが、その後ナロジチ地区の新聞を含めいくつかの現地メディアで取り上げられたこともあってか、多くの住民が知っていました。しかし、多くの住民にとってはまだ、「自分に関係のあるプロジェクトである」という認識は薄いようで、むしろ「もう一つの菜の花プロジェクト」である、ドイツ資本の会社による菜の花栽培への関心の方が高いと言える状況にあるようです。この会社は、去年からナロジチ地区内の汚染度が低いとされている地域で菜の花栽培を始めていますが、規模が大きく、また、その場所が住民が普段通る道沿いにあるため、住民にとっては「菜の花」といえばまず「ドイツ」となってしまうようです。チェルノブイリも、住民説明会を実施するなど、周知の努力はしておられますが、最終的には「住民が参加してこそそのプロジェクト」なので、もう少し住民に理解してもらえるように働きかけてもいいのでは、と感じることがありました。

ただ、チェルノブイリの方でも、スタディツアー期間中に村議会回りをされ、チラシ類や展示用のファイルなどを村議会に置いてもらうように働きかけたりしていて、こうした地道な努力により、少しずつでも理解が深まっていることは期待してよいのではないかと思います。ドイツのバイオ・エネルギー村でも、最初はなかなか住民に理解されなかったそうですが、「最終的には地道に説明をし続けるしかない」という話でした。

今回は、現地でのBDF装置受け入れのための書類上の手続きに時間を要しているため、待ち時間が何度も発生し、そういう時間を有効に活用すべく地区内を視察し、いろんな人たちに話を聞いて回ったのですが、その中で子ども達と話している時に、いきなり「お金ちょうだい」と一度ならず言われ、少なからずショックを受けました。これが「援助慣れ」に起因することなのか、それとも、日本での「10円ちょうだい」のようなノリなのか…、少し複雑な気分させられました。

今回は、経由地のモスクワで放射線測定器を入手し、現地滞在時にできるだけいろんな場所で計測するようにしていましたが、少なくとも住民の活動区域ではだいたい0.10~0.20 $\mu$ Sv（マイクロシーベルト）程度と、そう高い値を示すことはなく、最高でもナロジチ行政庁近くの公園の0.34 $\mu$ Svでした（菜の花畑はこの倍程度）。しかし、その後、スタディツアーで訪れた地区内の森の食堂では、なんと菜の花畑よりも高い1.0 $\mu$ Svに近い値が表示され、改めて強い汚染地であることを思い知らされました。

この8月初めより再度、現地に行ってきます。現在、このプロジェクトは予期せぬ停滞状態にありますが、このような障壁を乗り越え、日ウ双方にとって、よい方向に進展することを願って止みません。



## 8月末 BDF 製造装置稼働に向けて～緊迫の交渉～（池田 光司）

菜の花プロジェクトは、みなさん一人ひとりからの寄付に加えて、国際ボランティア貯金（以下ボラ貯と略す）の助成も受けて進められています。その中でも、バイオディーゼル燃料（以下 BDF と略す）製造装置の購入から稼働までに必要な費用については、そのほとんどがボラ貯の助成で賄われる予定です。BDF 製造装置は、当初 6 月半ばまでに準備を終えて、今回のスタディーツアー訪問時に稼働を始める予定でした。しかし、BDF 製造装置を人道支援物資として扱うために必要な認可や、装置を設置する建屋の改修工事に必要な認可が遅れ、このスケジュールを守ることはできなくなりました。スタディーツアー訪問時は、まだ BDF 製造装置は届いておらず（人道支援物資の認可は 6 月 5 日に下りて貨物の受取り手続き中）建屋も改修されていない状況でした。ボラ貯については、この遅れに伴うスケジュール変更を認めていただきましたが、申請年度の期限の関係上、遅くとも 8 月末には稼働にこぎつける必要があります。

このような状況の中、今回のスタディーツアーにおいて、8 月末の BDF 製造装置稼働を目指してナロジチ側との交渉が行われました。交渉のキーマンはナロジチ地区議会副議長プロコペンコ氏、交渉のポイントは建屋改修工事の認可でした。交渉は、当初 1 回（6/29 ナロジチ行政庁舎にて）の予定でしたが、話をさらに詰めるためにプロコペンコ氏の申し出により、7/1（火）シトーミルにあるホステージ基金事務所で 2 回目の交渉が行われました。互いに菜の花プロジェクトの意義は認めるものの、プロコペンコ氏とチェル救との間には、プロジェクトの進め方（特にスケジュール）に関して認識のズレがあり、ときには語気を荒げながら、互いの溝を埋める努力がなされました。交渉の様子の一部を紹介します（傍点部は筆者加筆）。

プロコペンコ氏：「建屋改修工事に関する現在の状況について言えば、保健所に関する申請書類の準備はできた。また、防火用水の問題については、現在詰めているところである。しかし、技術的な条件で新たな問題が発生した（この問題は、7/1 の交渉直前に発覚）。使用する BDF 製造装置がウクライナの工業用機器の基準を満たしていることを証明しなければならない」

河田氏：「証明書は誰が作るのか？」

プロコペンコ氏「キエフの中央政府レベルの労働保安省庁で証明書を発行する。証明書があれば 8 月末までに BDF 製造装置を稼働できるが、証明書がないとすると私自身で今からどうやったら証明書を発行してもらえるかを調べる必要がある」 —〈中略〉—

河田氏：「なぜ今ごろになって証明書が必要と分かったのか。事前に分かっていたいかなかったのか。—（略）—今からオプロート社（申請書類作成業者）に電話してでも、証明書発行に何か必要なのかを聞いて欲しい。」

申請が進むにしたがって、新たな申請が必要になる実態が明らかになりました。ウクライナの煩雑な法制度への対応に苦慮している様子が、プロコペンコ氏の言葉の端々から感じ取られるものの、一方で、8 月末に BDF 製造装置を稼働する必要があります。日程を詰めるためのぎりぎりの交渉が行われました。そして、プロコペンコ氏の次の言葉を引き出すことができました。

「8 月末に運転を実施するためには、8 月 5 日（火）までに運転が可能かどうか決めないといけないということですね。—（中略）—今、確実に 100%保証できないが、できるかぎり運転が可能となるよう努力する」

この交渉をベースに、竹内氏を通して進捗のフォローがなされています。また、8 月初めには原氏、宮腰氏が建屋改修工事に立会うためにナロジチに向います。

プロジェクトを一歩進める大変さ、顔を突き合わせての話し合いの大切さを実感した、スタディーツアーでの交渉でした。



## 合宿報告

合宿当日の7月26日、伊那市は過去最高気温(35.9℃)にあと0.3℃まで迫る猛暑日であった。ところが会場である「ロジ吹上」の玄関に入ると、室内はひんやりとしている。周囲に植えられた広葉樹が、枝を大きく広げて強烈な陽光を遮っていること、天井の高い木造建築であることで、エアコンなしでも快適なのだ。しかも、1階の3部屋とホールが貸し切り状態。2日間ゆったりと過ごすことができた。



簡単な昼食のあと、宮腰さん制作の映像記録「二年目の春・現地滞在編」を鑑賞する。

BDF 工事のため6月に訪問したが、予定通り進まない工事の合間に、原さんと村内を散策した際撮ったもの。牛・馬などと親しく交わりながら暮らすナロジチ村民の笑顔と、次々飛び出す「役人不信の言葉」が印象に残る。今回のメインテーマは、昨年引き続き「菜の花プロジェクト」。ここへきて役人天国にありがちな規制の壁の前で、やや足踏み状態が続く事業を、今後どう進めていくかが課題である。

- \*BDF・BGプロジェクトの現地マネージャーを、相手側の意向も聞きつつ、早急に決めた方がよい。そのために関係者が集まって、契約書の再確認をすることも必要ではないか。
- \*ナロジチに現地事務所を置いた方がよい。BDFは製造だけでなく、その管理にも細心の注意が必要なので、作業員の選定にも配慮を。
- \*現地の作業が進んでいないBGについて、相手側の理解を得るために、日本の実例を映像で紹介したり、簡単なモデル装置を持ち込んだらどうか…などなど。

1日目は小野寺さん、2日目は「菜の花楽舎」の関さんも加わり、時間に追われる運営委員会より幅広く先を見た意見交換が行われた。

いずれにしても、現地との共通理解が不可欠。8月に訪問する原さん・河田さんの宿題が増えることにもなった。丁寧に事業を進めるほど、人手も経費もかかる結果に。皆様のご支援をお願いします。

(小牧 崇)

## 総会&チェル救済一 報告

6月14日午後、ウィルあいち(女性総合センター)視聴覚室を会場として「08年度通常総会」が開催され、前年度事業報告・決算など3議案の提案があり、承認されました。

今年は、昨年スタートした新事業を継続発展させる年でもあり、特に新たな議論がわき起こることもなく議事は淡々と進み(理事長として司会を担当している私としてはありがたかったのですが)、短時間で総会は終了しました。しかし、年1回の総会参加者がじり貧となっている近年の状況は問題です。参加会員が増え、活気溢れる総会になってほしいと思いました。

(正会員の方で当日出席又は書面出席されなかった方は、是非「正会員再登録」のご連絡を事務局までお願いします。また、新しく正会員になる事を希望される方も大歓迎です。)

総会后、直前まで現地ナロジチで作業に携わっていた原さんの報告と、宮腰さん作成のビデオの上映を行い好評でした。腕の冴えを見せた原さんの写真展も、人気を集めました。(小牧)



## ドイツ バイオ・エネルギー村見学報告 (08.6/20-26) 戸村京子

### その1. ユーンデ村 (ニーダーザクセン州ゲッティンゲン市近郊)

#### <ガイド・ツアー>

キエフ大留学時の知人(フライブルク出身、ライプツィヒ大学生)に頼んで、ユーンデ村見学の予約をしていた。14:00にガイドのプレッケルさんが、村のバイオガス施設で待っている。2時間の英語のガイド・ツアーは、2人で78ユーロ(13,260円)。

ユーンデ村は、ドイツで最初のバイオ・エネルギー村で、人口750人の農村。10軒の酪農家の牛糞等と農作物から生産したバイオガス・エネルギーで、電気と温水暖房を自主独立的に供給している。ほとんどの村民はゲッティンゲン等へ働きに行っている。



<ユーンデ村のプレッケルさんと>

#### <バイオ・エネルギー村プロジェクト>

ゲッティンゲン大学の働きかけにより、21の候補地からユーンデ村が選ばれた。その基礎的概念は、①バイオガス原料となる小麦・ライ麦・ケール・コーン・ひまわりなどのバイオマスは、自分たちの土地で太陽のエネルギーを受けて育ち村で再生産が可能で、発酵させてサイレージは長期間利用できる。②気候温暖化防護のようなグローバルな問題と、代替エネルギーは地域レベルでのみ利用できる。

プロジェクトの目的は、資源と気候の保護、土と水の保護、種の多様性、地域の強化、村の連帯意識で、7割の村民が賛同している。

#### <バイオ・エネルギー・プラント>

①バイオマス発酵槽・ブロック型火力発電所付設が2基…1万㎡の液体肥やしと1.2万tのバイオマスが必要。450万KWh/年の発電。300万KWhの温水暖房が、村の暖房配管網に供給される(コージェネ)。②木材チップ燃烧ボイラー…冬場の寒波時に稼働。③村内暖房配管網…350万KWh/年の暖房(80℃の温水)。これらにより、CO<sub>2</sub>の3,300t/年の放出が回避できることになる。



<マウエンハイム村のバイオガス装置>

### その2. マウエンハイム村 (バーデン・ヴュルテンベルク州 ポーテン湖近く)

#### <ケラー家は肥育牛農家>

車でアウトバーンを150キロのスピードで20分、マウエンハイム村へ到着。村民400人・100世帯。なだらかな畑の牛たちを、あれも我が家の牛たち、こっちもと示す。夫のラルフ・ケラー氏は、2005年に村長ら3名と共同出資で「バイオガス有限会社」設立。どこか原さんのような雰囲気のある、親しみやすい夫婦だ。ドイツで二番目のバイオエネルギー村だが、ユーンデ村のような大学の協力は無いという。

#### <バイオガス・プラント>

バイオガスの発酵槽や付属の施設がいくつもあった。バンカー式サイレージが積み上げられ、白いシートに覆われていた。ダンプカーが、フットボール場で刈った緑の芝を降ろしている。ユーンデ村と同じように、バイオガスで発電し、余熱で温水を作る。赤い大きな船形の施設は、サイレージを均一に投入するところ。バイオガスの発酵槽の中を、双眼鏡のようなのぞき口から見るが、よく見えなかった。とんがり屋根の丸い施設の中には、バイオガスの大きなバルーンが膨れていた。

近くに、ソーラー・コンプレックス社の木材チップ・ボイラー(冬場に対応)がある。発電量250KWh/h、200万KWh/年、コージェネによる温水暖房200万KWh。バイオガスのコージェネと木材チップの施設を合わせると、村の電力需要の3倍、温水暖房の100%を生産、自給している。電力は、再生可能エネルギー法によって売電、温水供給パイプは村内3.5キロ。7割の世帯がこのシステムに切り替えている。再生可能エネルギーは、小規模・分散型の「エネルギーミックス」で行なうのがよく、エネルギーの自立・お金の地域循環・地域経済の促進・地域再生をめざしている。

# 特集!! [スタッフ参加者の感想]

この度、「菜の花スタディツアー」に参加でき、大変感動しました。今までは、映像や紙面で素晴らしいプロジェクトがあるのは認識していましたが、その現場を目の当たりにし探知機のあのピッピッと放射能が発生している音を耳にした時、その活動を実感しました。



あの広大な大地が菜の花で埋め尽くされる日を、切望しました。また、関係者の方々の熱い意見や交渉に、耳を傾ける機会を得られたのも、貴重な体験となりました。物見遊山の旅と異なり、本当に実のある学びの旅、決して簡単には出掛ける事が不可能な場所への同行に、小さな不安と大きな期待が相重なりましたが、実に有意義なものでした。また現地の色々な方々との交流で、おもてなしを受け、その国の習慣にも新しい発見や喜びも味わえたのは、これまでスタッフの皆さんが築かれた実績のお蔭だと心から感じました。今後のチェルノブイリ救援・中部のご活躍とご発展をお祈りします。お疲れさま。そしてお世話になり、ありがとうございました。 (愛知県：小西 弥栄)

\* \* \* \* \*

旅を振り返り強く印象に残っているのは、チェルノブイリ原発の間近に行った事。そこに向かう道すがら、バスの中から眺めるウクライナは、荷馬車が行き、放牧の牛たちが悠々と道路を横切る、どこまでも続く平原の大地だった。到着すると、それは石棺に覆われ鎮座していた。

掌の放射線測定器は、毎時 12~14 マイクロシーベルト、日本の平均の 120~140 倍を示していた。チェルノブイリ消防署には、消防士さんが育てる動物たちがいた。イノシシ・アライグマ等の小屋を、副署長の若い男性がバンビという名の鹿を連れ案内してくれた。動物たちが、汚染地で勤務する消防士たちの心を癒し、安らぎの拠り所となっているという。

廃墟と化した、当時の共同住宅も訪ねた。3K~3DK 程の広さで、慎ましやかな労働者の生活を想像する。埃と木片で荒れ果てた部屋の窓の外に、ロープと洗濯ピンチが見えた。事故の直前までここで暮らした人たちの、その時の様子を思ううち、耳がぼーっとして身体が熱くなり、私の中で時が止まった。たった 1 回の事故が、人や動植物たちの命を根こそぎ破壊した。原発は恐ろしい。地震多発の狭い日本に 50 基以上の原発を抱かえているのだ。

やっぱり原発はイラナイ。

(愛知県：中西 しげ子)

\* \* \* \* \*



「菜の花スタディツアー」…今回の旅で一番印象深かったのは、やはりチェルノブイリの原発でした。本で読んだり、写真で見ていたとおりの外観でしたが、自分のすぐそばで自分の目で見て圧倒的な力で迫ってくる巨大な石棺。それもまだ放射能を出し続けている。ただただ恐ろしかった。1992 年に出版された貝原浩さんの画文集「風しもの村から」で解説されている「今なお止まぬ 4 号炉の放射能拡散」の文章のまま、2008 年の現在も…。おひさま幼稚





園の子ども達の7~8割が病気ということ、これから先もずっと続いていく悲しみ。旅から帰って、チェルノブイリの事故のあと出版されたいろいろな本を読みかえてみる。自分にできることは何なんだろう。

「チェルノブイリ救援・中部」の人たちのこれまでのいろいろな積み重ねの中でのスタディツアー、いろいろありがとうございました。菜の花プロジェクトがうまくいきますように。 (長野県：遠藤 和枝)

\* \* \* \* \*

事故から20年が過ぎ、僕の意識の中でもチェルノブイリの事は過去のできごとと思っていましたが、今回のツアーに参加させていただき現実を見て、放射能汚染の実態や汚染地域の子どもの健康被害などを聞き、20年前と変わらない終わる事のない事故の悲惨を、あらためて実感しました。この20年、世界で戦争や天災などが次々と起きて、僕の中でも世界でもチェルノブイリの事を忘れようとしているように見えます。しかし、忘れることのできない現実のある事を、このツアーで実感しました。ウクライナの「美しい悲劇の大地を希望の大地へ変える」今回の菜の花プロジェクトは、これからもいろいろな問題があると思われませんが、成功させたいと思います。ウクライナを案内していただいた消防署の皆様、「チェルノブイリ救援・中部」の皆様、竹内さん、ありがとうございました。 (長野県：遠藤 雄二)

\* \* \* \* \*

私は、ナターシャさんのコンサートのお手伝いをしています。今回、彼女の帰れない故郷に行ったことが、一番頭にあります。そして、ここで菜の花プロジェクトが動きつつあること。しかし、このプロジェクトはとても良いことなのですが、なかなかスムーズには行かない事がこのツアーでわかりました。このことに関しては、私は知識不足なので多くは語れませんが、まず、いろいろな人に知ってもらうことが大切だと思います。これだけ海外に渡航する人が増えても、チェルノブイリに行くこと自体すごい事だと思います。海外によく出かける会社の人や友人に「チェルノブイリ」というと、途端に話が途切れることが多く、自慢しようと思って誰も興味を示しませんでした。もう少し「チェルノブイリ」を身近に感じることができたらと思います。次回は新規の人、学生や若い人の多いツアーに参加したいと思います。多くの人たちにわかってもらえればこの「プロジェクト」や「チェルノブイリ」に賛同する方も多くなり、もっと良いアイデアが浮かぶかもしれません。少なくとも、現在注目を浴びている「環境」というところから入っていくと、とても身近に感じるかもしれません。 (東京都：磯部 美樹)

\* \* \* \* \*

救援様の努力のお陰で、チェルノブイリの皆様からのご好意に恐縮の旅でした。

チェルノブイリの薬局店様、消防署、女性の方々と直に触れ合え最高の旅でした。おいしいお食事や、勝手に薬局店の畑でもらった果物、帰り便では幸運にもビジネスクラスで横になり、グッスリ眠れましたね。町で座っているチェルノブイリの住民の老人の方々にも簡単なお話が聞けると、一層





現状がわかります。村副議長との会議、市民の方々と  
の会、アートセラピーの絵の先生のお話なども良か  
ったですね。22年後の今も将来も、悲惨な土地が一  
面に続いていて、泣くに泣けない現況です。早く除去  
して、生活を向上できるでしょうか。宗教の建物は新  
しくきれいですが、高層ビル（ホテル）は恐くてベラ  
ンダにたたずめませんね。トイレは、便器があると少  
しは臭気も減るかなあー。（愛知県：畔柳 みつ子）

\* \* \* \* \*

経済の発展なくして人々の幸せはないのか？ 原発の事故現場を見ただけでは、原子力の  
恐ろしさは実感できません。幾らガイガーカウンターがピーピーと鳴り響いても、私には痛  
くも痒くもありません。しかし、原子力発電の関係者が住んでいた人口4万5千人のプリ  
ャチ市に入ると、その思いは吹っ飛んでしまいます。特別に許可され、無人のアパートに足  
を踏み入ると、内部の家具や建具は勿論、窓枠・天井・壁・床材まで剥がされ、持ち去ら  
れていました。そして近くの荒れ果てた小さな公園には、ブランコと滑り台がひっそりと残  
り、「死の街」が、私の心にとどめを刺すように見つめていました。声をなくして立ち止まる  
人、考え込む人と、グループの動きは緩慢になっていきました。

原子力の平和利用については、色んな意見・考え方がありますが、この現実の姿を目にし  
た私も、改めて大きな議論が必要だと思いました。G8の会議が、丁度北海道で開催されて  
います。世界の人口が毎年8千万人増加している現状があり、そのエネルギーを如何にする  
か？ を考えると問題の大きさを強く感じます。

①原子力の平和利用は推進されるべきか？

（“駄目なものは駄目”の原理主義でよいの  
か？）

②平和の尊さ、戦争が何よりの環境破壊である。

③政治の安定、経済の発展なくして、人々の幸  
せはないのか？

④国内外での地域間格差をどのように解決す  
るのか？ Etc…。長い日誌より 一部抜粋しま  
した。（大阪府：西村 大吾）

\* \* \* \* \*

昨年、スタツアを計画した時には、菜の花畑に加えてバイオディーゼル装置の運転にも、  
皆さんの参加ができるものと考えていた。

しかし、その後の展開は予想と違い、ウクライナの行政機関の複雑な許認可に振り回され、  
計画は大幅に遅れて、バイオディーゼル装置はとうとうナロジチに届かない中でのスタツア  
となった。現在、予定から遅れて8月末の試運転目指して奮闘中である。改めて歴史や文化  
の違う国で何かを行うことの難しさを思い知らされたことだった。参加者の皆さんには申し  
訳ないと思う。しかし、畑では春蒔きナタネの満開は終わり結実し始めており、昨年撒いた  
秋蒔きナタネは背丈ほどに成長し豊かに実っていた。ナタネ栽培についてはほぼ予定通り進  
んでいる。改めて振り返れば、大人の参加者の皆さんに助けられて楽しい時間が過ごせた  
と同時に、ますます期待の大きさを実感させられた旅でもあったと思う。（愛知県：河田 昌東）





スタディーツアーの際に、ナロジチのナタネ畑を見学した。昨年の秋蒔きナタネは人間の背丈ほどに成長し、たわわに実っていた。7月11日には無事収穫との報告を受けた。秋蒔きナタネは生育期間が長く収量も多い。結果が楽しみである。今年の春蒔きナタネも花盛りが終りに近づき、こちらも結実を開始していた。ナタネのあとに植えたライ麦も生長し、もうじき収穫される。こうして、汚染土壌でのナタネ栽培は順調である。残るはバイオディーゼルとバイオガス製造装置の建設、運転である。こちらは、なかなか思うように進まずイライラする日々が続く。プロジェクト提案から2年経ったが、考えてみれば結構早いペースではある。

### ● ナロジチに BDF 製造装置が到着、しかし・・・

5月にオデッサ港に到着しながら、ウクライナ政府人道支援委員会の許可が下りず、現地に運ぶことができなかった BDF 装置は、在ウクライナ日本大使館の馬淵大使によるユーシェンコ大統領への直訴書簡などの助力を得て、6月5日ようやく認可が下りた。これで解決と思いきや、オデッサヤジトーミルの税関の沢山の手続きに振り回され続けた。

そして、7月29日、ようやく BDF 装置はナロジチに搬送された。この間、書類作成や税関への出頭など、事態解決に奔走してくださった農業生態学大学のディードフ教授と、ホステージ基金のキリチャンスキー、ドンチェヴァ両氏には心から感謝したい。装置はナロジチに到着だが、これですぐに運転できるわけではない。装置を設置する建物が古く、屋根や床の修理が必要である。こちらの方もすでに必要な書面を提出してから数ヶ月がたつが、一向に着工認可が下りず、工事開始が遅れているのである。

### ● ソ連は崩壊したが・・・

ソ連が崩壊して久しいが、現在のウクライナには当時の官僚制度がほとんどそのまま温存されているようだ。全てに必要な申請と認可の数々に、国民は振り回されている。そんな制度には必ず汚職と賄賂が付きまとうのも常識。最近の中日新聞によれば、五輪が近い中国の大きな課題のひとつは、官僚や警察の横暴と汚職だという。同紙によれば、中国では「汚職は文化、賄賂は社会の潤滑油」だという。日本も最近の状況をみれば綺麗とは言いがたいが、旧共産圏には一様に同じ問題があ

るようだ。それは官僚の腐敗が原因である。これまで、医薬品や医療機器などの救援物資を送り続けてきた間は、こうした問題に遭遇することはなかった。あるいは、知らなかったかもしれない。菜の花プロジェクトを始めて、改めて我々はウクライナの官僚制度の非効率に直面し、もがいているが、それは我々だけではない。ナロジチの街中で会う一般住民の行政機関への不信は、並々ならぬものがある。彼等は、数十年の長きに渡ってこうした困難と戦ってきたのだと思う。

### ● それでもプロジェクトは進む

こうした困難はあるものの、プロジェクトは着実に進むと考えている。今後3年間に、バイオディーゼル油の生産とバイオガスの生産を軌道に載せ、住民の利益に供することは可能である。ウクライナにもこのプロジェクトの意味を理解し、困難や問題に取り組む我々を助けてくれる人々がいるからである。今後の大きな課題は、バイオディーゼル油やバイオガスをどのように利用し、ナロジチで定着させるか、ナタネの栽培規模を拡大し土壌浄化を進めるか、を住民との話し合いで進めていくことである。昨年、ウクライナ政府も汚染地域の復興計画を策定した。このプロジェクトは、ウクライナ政府にとっても先行的な事業となる。ナタネ栽培は今やウクライナに定着し、今年の栽培面積は180万ヘクタール、世界で5番目に成長した。バイオディーゼルの国内生産も始まった。

最近、ティモシェンコ首相は、ウクライナにおけるバイオガス生産の重要性について述べている。(河田)

名古屋 NGO センター中期計画作成に向けて

## これからのNGOの取り組みを考える集い 2008

### 今、私たちに求められているもの

日時：2008年8月30日（土）13:00 から 31日（日）15:30 まで

場所：名古屋学生青年センター（名古屋大学南門前）

名古屋 NGO センターには、「ステファニ憲章」という、ミッションと行動規範を表したものがああります。その中には、私たちがめざす社会として…「1. 平和な社会 2. 人権が守られる社会 3. 人々の参加によって創られる社会 4. 調和のとれた社会 5. 地球規模の視点で行動する社会」と書かれているのです。さて、今の社会は、そのどこまで到達しているのでしょうか？

「名古屋 NGO センター」も発足し、すでに 13 年が過ぎました。前身である「第三世界交流センター」から通算すると、20 年が経っています。その間、世の状況も大きく変わったのに関わらず、国内・国際関係なく、解決しなければならない問題は、むしろ増えていると言えるかもしれません。

そういった状況も鑑み、このたび、加盟 NGO、また名古屋 NGO センターとして今後どう取り組んでいくかを話し合う集いを開催することにいたしました。

中部地域と海外の活動をどうつなぐか、この地域に何を提案しどのような社会を切り開いていこうとするのか、変化しつつある NGO と政府・自治体との関係をどうするべきかなど、私たち NGO がこの中部地域で何をしたいか、議論していきたいと考えています。

そして、これらの話し合いをベースにして、名古屋 NGO センターという器をどのように活用するのか、果たすべき役割、取り組むべき課題、ネットワークの意味、NGO センターと加盟団体との関係性などについて考えていくことができればと思います。

ぜひこの機会を通して、この集会から生まれ・発するものが、名古屋 NGO センターはもとより、この地域の NGO を新たに創り変えていくきっかけとなればと願っています。多くの方々のご参加を切に望んでいます。

2008年7月18日

名古屋 NGO センター中期計画作成委員会

今、名古屋 NGO センター（チェル救も加盟団体となっている NGO 支援を目的とする NGO）では「中期計画作成委員会」を発足し、今後の NGO の展望について、活発な議論を繰り広げています。

当「チェル救」に当てはめて考えると、私たちの多くは、「脱原発」をキーワードとして集まり、原発事故の悲惨な実態を調査し、そして発信し、原発の危険性を訴えてきました。にも関わらず、原発推進者（利権者）は、争点を「エネルギー危機」や「温暖化防止」へと巧みにすり替え、「廃炉」はるか、「原発回帰」の声さえ叫ばれる世の中になってきています。

「子ども達の未来のために」と願う私たちの活動が、不完全燃焼を起こしているような気がします。

8月30～31日の「集い」は、おもしろい企画となりそうです。皆さんも参加してみませんか？ 熱く語り合いましょう。

詳しくは、名古屋 NGO センター（TEL052-483-6800）または、チェル救事務所までお問い合わせください。（神野英樹）



## 竹内さんのウクライナ便り

キエフとしてはかなり暑いと感じられる日が、7月にはずっと続いていましたが、月末になってやや気温が下がり、陽が落ちてからは特にしのぎやすくなりました。だいぶ以前、私がキエフ言語大学で日本語を教えていた頃、国際関係大学の学生だったMさんが、言語大に日本語の授業を受けに通っていたことがあったのですが、その後国際関係大を卒業した彼女は、ウクライナで大学院も出た後、日本の文科省の研究生プログラムで早稲田大学に留学、日本とEUの関係の研究で博士課程を終え、昨年キエフに戻ってきました。現在は、日本大使館の外部職員として「草の根無償支援」のプログラムを担当しており、雑誌にも記事を寄稿しているようですが、彼女が書いた「オレンジ革命以後のウクライナの内政と外交」という論文を含む本が日本で今年出版されたそうで、それを最近ご本人からいただきました。現今のウクライナ情勢に関するウクライナ人自身の文章が日本で紹介された例は、私の知る範囲では数少なく、大いに喜ばしいことです。

その際、雑談の中で話に出たことですが、彼女が東京の喫茶店で受けた印象として、「聞くともなく耳に入ってくる、成人女性たちの会話の内容のなさ」を挙げ、英語の個人教授のバイトをした相手の会社員たちの話題の乏しさ（食べ物の話くらいしかない）に驚きを示していたのは、日本人としてやはり情けないことでした。

「本音の言えない社会」で、人と心を開いて交わる機会が得られないまま仕事に追われ、中身のない情報だけを与えられて孤立感を強める若者たちが、相手を選ばない殺傷行為などに走るのではないか…という想像に、Mさんとの会話の結果、私はたどり着きましたが、日本の若い人と接する機会がこのところ稀なので、もちろん的外れの想像かもしれません。何かの新製品が、例えばドーナツのチェーン店で売り出されると、行列ができ、その行列に沿って「あと何時間」というような札が立てられるという話も、

私には驚きに値するものでした。ソ連時代の物不足の折の行列の記憶は、当地のある程度の年齢以上の人たちにはまだ生々しく残っているものであり、エフトゥシェンコの詩に作曲されたショスタコーヴィチの交響曲第14番第3楽章（「店で」）や、現代ロシアの作家ソローキンがソ連時代に書いた実験的？小説（行列に立つ人々の会話だけで成り立っているもの）などの作品にもその記述がみられます。日本の「豊かな社会」の「豊かさ」は、誰のためであり何のためなのでしょう？

それとは全然関係ありませんが、やはり最近、ウクライナ東部のハリコフの歴史研究者Z氏に会い、彼とキエフの教育学大学の教授P氏が共同で行っている、第2次大戦後のウクライナにおける日本人抑留に関する研究の進み具合について聞きました。この研究は、山口県の元抑留者の方々が部分的に資金援助をされており、その仲介をしたのは私なので、時々こういう報告を受けているわけです。「元抑留者の方の手記や手紙などがあれば、その訳も、研究成果を収める本に含めてウクライナで出版したい」というZ氏・P氏の希望があったので、日本側にお伝えしたところ、ネットで見られる、ザポロージェ市に抑留されていた方の手記を紹介されました。しかし私自身が訳す時間的余裕が全くないので、今年キエフ大学の日本語科を卒業したYさんにお願ひし、ウクライナ語に訳してもらっているところです。そのほか、やはりネット上で、元抑留者の方が当時の回想を絵に描いたものも見る事ができるそうです。関心のある方はどうぞご覧ください。（8月2日）

<http://kiuchi.jp.nobindex.htm>



## 事務局便り

菜の花プロジェクトは、今年6月に現地ではBDF 装置を設置・稼働させ、また、BG 装置も設置する予定で進めてきたが、この予定が大幅に遅れている。3月27日に船便でウクライナに送ったBDF 装置が、ウクライナ内閣付属人道支援問題委員会により、救援物資と認められないとの判断がくだされ、5月7日にオデッサに到着したまま、ナロジチ地区への搬入ができない状態が続いた。現地カウンターパートはもとより、駐ウクライナ日本大使館にご協力をお願いし、ウクライナ大統領や人道支援問題委員会議長へ、再三書簡をもって働きかけていただいた。それが功を奏してか、やっと6月5日に人道支援物資としての許可がおりた。一方、設置準備工事のため、「日本からの専門家受け入れ可能」との情報が入り、原さんが現地入りしたところ、建屋改修工事許認可申請の手続きが進んでおらず、BDF 装置稼働許可がおりるのは、8月末であろうとの情報が伝えられた。このプロジェクトは、多くの方々のご寄附と国際ボランティア貯金助成金によって支えられ、進められている。しかし、進捗の遅れに伴い、ボラ貯申請変更を提出しなければならない事態となった。6月13日から、国際ボランティア貯金センターの担当者の方々と頻りにやりとりを行い、最終的には「～(BGの)10月完了は無理であろうとの結論に達しました。現状の進捗状況では(ボラ貯のBGに対する助成金を)返還せざるをえないと思います。現地大使館の強力なバックアップ等もあり、本当に現状を打開するために、粘り強く対応してきた所存ですが残念でなりません。当方としては、気を取り直し、仕切りなおして、多少時間がかかっても、着実に、目的に向かい進んでまいりたいと思います。」とのメールを送り、ご了解をいただいた。親身になってアドバイスをしてくださった、ボランティア貯金センターの皆様には、心から感謝申し上げたい。(山盛)

ポレーシェの新規購読者(無料配布)を募集中です。あなたのお友達を紹介してください!!  
一緒に地球環境問題やエネルギー問題、そして「菜の花PJ」を語り合う友達の輪を広げましょう。

## 編集後記

☆猛暑の日、「お暑うございます」の言葉とともに、三浦さんから郵便が届きました。待望の『スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著(三浦みどり訳)「戦争は女の顔をしていない(群像社/2,000円)」が出版されました!』というお知らせ。大阪・長野・札幌・東京・名古屋などで、講演会の準備やご案内に奔走した各地の皆さん、お元気でしょうか? (美)

☆何十年ぶりに盆踊りに行ったら、子どものころ楽々に踊れたのに…踊れない! ことが判明。リズムに乗れないでいたらしく! 由々しき問題だ。(佳)

☆国境とは、異なる民族圏を区切るだけではなく、文化も政治も経済も…だ。野山も畑も街も全てが美しく整ったドイツ・ベルリンの長距離列車の発着駅で、ウクライナ行きの列車へ一歩足を踏み入れたとたんに、ウクライナの匂いがし、ウクライナ語・ロシア語が飛び交い、ある種の緊張を感じて、もうそこで国境を越えた気がした。(京)

☆恒例の伊那合宿で、「9.11 6年目の真実(ベンジャミン・フルフォード)」というDVDを上映した。誰も眠ることなく、最後まで真剣に見ていただいたが、皆の心にはどのように受け止められたのか、興味深いところである。映画「マトリックス」の主人公ネオは、現実の世界に戻るため「赤い錠剤」を飲む事を選んだ。…果たして私達の選択は? (J)



〒456-0022 名古屋市熱田区波奇町 20-14  
印刷「エープリント」  
TEL・FAX (052) 871-9473